

ロシアに苦しめられ続けた、知られざるウクライナ政治30年史

SEEKING DEMOCRACY

2022年3月30日（水）13時05分

フェルナンド・カサル・ベルトア（ノッティンガム大学准教授）、ジョルト・エニエディ（セントラル・ヨーロッパ大学教授）

197

2



ウクライナは世界的な民主主義防衛の戦いの最前線とも受け止められている（3月20日、ベルリン） ADAM BERRY/GETTY IMAGES

＜旧ソ連から独立した民主主義国家の中でも、プーチンはウクライナを最も執拗に攻撃してきた＞

今回のロシアによるウクライナ侵攻は、既にさまざまな角度から分析されてきた。

ロシアのウラジーミル・プーチン大統領の誇大妄想が原因だとか、NATOの東方拡大がロシアを追い詰めたとか、いや、プーチンはロシア帝国を復活させたいのだ、といった具合だ。

だが、1991年8月にウクライナがソ連から独立を宣言して以来、その政党政治つまり民主主義体制がロシアの度重なる攻撃を受けてきたことは、あまり語られていない。

地理的にも政治的にも大きな国の隣に位置する国の政党政治は、その大国の政治情勢に影響を受けやすい。

例えば、モンテネグロではセルビアとの関係が、キプロスではトルコとの関係が、国内政党の対立構造を決定付けている。

同じような現象は、ソ連崩壊で誕生した民主主義国にも見られる。モルドバでは2001年以降、親ロシア陣営（共産党と社会党）と、EU加盟を目指す親欧米派（自由党と民主党）の対立構造が鮮明になった。ジョージアでは、2008年の南オセチア紛争でロシアに敗北した4年後、政権与党が国政選挙で敗北した。

だが、民主化した旧ソ連諸国のうち、ウクライナほどロシアの介入に苦しんだ国はない。その30年にわたる政党政治を振り返ると、主に3つの時代に分けることができる。

第1期は1991年の大統領選から、2004年末のオレンジ革命までだ。この時期は、しょっちゅう選挙制度が変更され、各政党も組織化されておらず、複数政党制になったといっても極めて不安定だった。

唯一の例外は共産党で、ウクライナ最高会議（定数450）で最大野党の位置を占めていた。

だが、ウクライナ議会で何より顕著なのは、無所属の議員が極めて多いことだろう。1994年の時点で168人、2002年も66人が無党派だった。

しかし1999年にロシアでプーチンが権力を握ると、その余波はすぐにウクライナにも表れた。

特に2003年のロシア下院選で、プーチン率いる政党「統一ロシア」が地滑り的な勝利を収めると、翌2004年のウクライナ大統領選では、親ロシア派と親欧米派の対立が鮮明になった。

歴史から違う東部と西部

親ロシア派の中核を成したのは、ロシア系住民が大多数を占めるドンバス地方選出の議員らが設立した与党「地域党」で、親欧米派の中心は中道右派「われらウクライナ」だ。

11月に行われた大統領選の決選投票は、地域党を率いるビクトル・ヤヌコビッチ首相と、われらウクライナを率いるビクトル・ユーシェンコ元首相の一騎討ちとなった。

次のページ 第2期には3つの有力な勢力があった

1

2

3

次のページ

ロシアに苦しめられ続けた、知られざるウクライナ政治30年史

SEEKING DEMOCRACY

2022年3月30日（水） 13時05分

フェルナンド・カサル・ベルトア（ノッティンガム大学准教授）、ジョルト・エニエディ（セントラル・ヨーロッパ大学教授）

197

2

結果はヤヌコビッチの勝利だった。ところが政府による不正操作があったとする抗議デモが全国で起きて、最高裁判所が選挙のやり直しを命令。

12月26日に再選挙が行われた結果、ユーシェンコが7%以上の差を付けて勝利し、大統領に就任した。この一連の出来事がオレンジ革命だ。

広告



ウクライナの政党政治の第2期は、やはり親ロシア派と親欧米派の対立に彩られたが、この時期は3つの有力な勢力があった。

親ロシア派の中心は引き続き地域党で、2005年にプーチン率いる統一ロシアと協力合意を結んで以来、一段とロシア寄りになっていた。

一方、親欧米派は、われらウクライナを中心とする陣営と、オレンジ革命の功労者であるユリア・ティモシェンコ率いる「ティモシェンコ連合」により構成されていた。

クリミア再編の思わぬ影響

オレンジ革命が起きた2004年から2014年までのウクライナの議会選挙や大統領選の結果を見ると、2つの陣営の支持基盤は、親ロシア派は東部、親欧米派は西部というように、地理的にはっきり分かれているのが分かる。

ドンバス地方とクリミアを含む東部は、エカテリーナ2世時代にロシア帝国の支配下に入ったため、ロシア系住民が多い。

一方、西部は11～16世紀半ばまでポーランド王国の一部となり、18世紀にオーストリア＝ハンガリー帝国に併合されたものの、戦間期に再び大部分がポーランド領となり、ウクライナ語話者が圧倒的に多い。

だが、そこにロシアが大きく介入してきて、ウクライナの政党政治のバランスは大きく変わっていく。

2012年の議会選挙で躍進した地域党が、共産党を誘って与党連合を形成しようとしたところ、条件として、ロシアが進めるユーラシア経済連合への参加を迫られた。

それは3年前にティモシェンコが道筋を付けた、EUとの連合協定（将来的なEU加盟を見据えた協力合意）を見送ることを意味した。

この与党連合の決定に激怒した市民は、全国で激しいデモ活動を展開。いわゆる「尊厳の革命」に発展した。

デモ隊と治安部隊の衝突が数週間にわたり続いた結果、2014年2月21日、ヤヌコビッチ大統領と野党は大統領選の早期実施と憲法改正に合意する文書に署名した。その翌日にヤヌコビッチがロシアに逃亡して政権が崩壊すると、翌月にドンバス地方で親ロシア勢力の武装蜂起が始まり、クリミアはロシアに併合された。

次のページ ロシアが食い込んだが、ウクライナの政党政治は正反対の方向に傾いた

[前のページ](#)

[1](#)

[2](#)

[3](#)

[次のページ](#)

ロシアに苦しめられ続けた、知られざるウクライナ政治30年史

SEEKING DEMOCRACY

2022年3月30日（水）13時05分

フェルナンド・カサル・ベルトア（ノッティンガム大学准教授）、ジョルト・エニエディ（セントラル・ヨーロッパ大学教授）

197

2

こうしてウクライナの領土に食い込んだロシアだったが、ウクライナの政党政治は正反対の方向に傾くことになった。

というのも、2014年5月の大統領選と10月の議会選では、実業家のペトロ・ポロシェンコ率いる新勢力が圧勝し、地域党は大統領選での得票率はわずか3%、議会選では150議席以上を失ったのだ。

親ロシア的な地域の一部が事実上分離したため、ウクライナ国政における親ロシア派の影響力は急低下した。

この2014年以降のウクライナ政党政治の第3期は、右派も限定的な支持しか得られなかった。

2019年の大統領選と議会選挙では、腐敗一掃を唱える俳優ウォロディミル・ゼレンスキーの新しい中道政党「国民の公僕」が大きな勝利を収めた。

ウクライナはネオナチの巣窟だとプーチンは言うが、ウクライナの人々は極右を拒絶し、穏健で現実的な政治勢力を支持したのだ。

とはいえ、腐敗一掃を主張してアマチュア政治家が登場する構図は、多くの旧ソ連諸国に見られるパターンで、その人気は2〜3年しか続かないことが多い。国民の公僕も、同じ道をたどるかに思われた。

だが、2021年の世論調査で、同党は右派と左派のどちらよりも支持率が高く、ウクライナにバランスの取れた民主主義が一段と定着するかに見えた。

それをプーチンが許すはずはなかった。その意味で、今回のウクライナ侵攻は、ロシアによる隣国の内政への大胆で継続的な介入の一例だ。

ウクライナの政治体制には多くの欠陥があるが、プーチンが全てを決定し、名ばかりの民主主義を名乗るロシアとは雲泥の差がある。そんなウクライナの民主主義がロシアにつぶされないことを願ってやまない。

From [Foreign Policy Magazine](#)

【話題の記事】

ウクライナで中国DJI社製ドローン分析製品が、ロシアによるミサイル誘導に使われている
自ら基地局を破壊し暗号化できない、携帯使えなくなり民間人の携帯を奪う……ロシア軍「情報」ダダ漏れ

※画像をクリックするとアマゾンに飛びます



2022年4月19日号（4月12日発売）は「**愛される100社**」特集。従業員に愛される**日米100社をランキング**。テレワークや育児支援、休暇……だけじゃない条件とは

[前のページ](#)

1

2

3